

# 2015 年度 特別講演会

## 大学で得るべき翼

### Topic

#### 第1部 講演会 : P. 1-6

- ・ 大学へ行くとバカになる
- ・ 夏目漱石の自己本位
- ・ 則天去私「自分で考えて行動するしかない」
- ・ 英語表現と主体性のありか
- ・ 己をたてる文化
- ・ 主体が存在するという物語
- ・ 「選択の科学」
- ・ 社会脳
- ・ 「こうするしかない」
- ・ 仕事と道楽
- ・ 情報とは
- ・ 「違い」が嫌なのか
- ・ 学生のうちに方法論を身に付けて

#### 第2部 懇談会 : P. 7

講演者：養老 孟司

東京大学 名誉教授

講演日 2015/11/18

招聘者 白井裕子

アーカイブ担当 福山聡太 三室大和 白井裕子



2015年11月18日、東京大学名誉教授の養老孟司先生をお招きし、特別講演会を開催しました。ご講演では「大学でえるべき翼」と題して、理工系の学生が、グローバルリーダーとして世界へ羽ばたくため、学生時代に何を不得ほしいか、大学で学ぶべきことは何か、養老先生からメッセージを頂戴しました。講演後は場所を移して、懇談会を開催しました。養老先生を、実体情報学博士プログラムの学生達と教員で囲み、歓談の場となりました。なおタイトル「大学でえるべき翼」は、実体情報学博士プログラムの学生である加藤陽君、加藤卓哉君、津村遼介君が決め、養老先生にご講演をお願いしたものです。

#### 講演者紹介



#### 養老孟司（ようろう たけし）

東京大学名誉教授 解剖学者

神奈川県鎌倉市生まれ、東京大学医学部卒業。1981年東京大学医学部教授、東京大学総合資料館館長、東京大学出版会理事長を兼任。1995年に東京大学を退官、1996年に北里大学教授。1998年より東京大学名誉教授、2006年から京都国際マンガミュージアム館長。主な著書に「身体の文化史」「バカの壁（毎日出版文化賞受賞）」「死の壁」「超バカの壁」「養老訓」「ほんとうの環境問題」「かけがえのないもの」「養老孟司の大言論」「ほんとうの復興」「身体巡礼」「自分」の壁。

### 第1部 講演

#### ■大学へ行くとバカになる

久しぶりに大学へ参りました。私は大学というところが嫌いで、定年前に教授職を辞めてしまいました。辞めた今では女房に「明るい表情をしているね、昔はあんなに暗い顔をしていたのに」と言われます。当時、国立大学の教授は、国家公務員なので厳しかったです。

最近よく高校の頃のことを思い出します。私は鎌倉で生まれ育ち、母親が開業医だったので顔が広がったのです。患者のお婆さんに「あなたは進路をどうするの」と尋ねられました。その当時、大学進学率は1割程度でしたが、「大学へ行こうと思います」と答えました。すると突然、相手は真面目な顔になって「大学へ行くとバカになるよ」と言われました。この歳になって思いますが、そのお婆さんがご存命だったら「やっぱりバカになったね」と言われる気がします。今でも覚えているということは、相当印象的だったということです。今、私たちは「大学へ行ったら利口になれる」という一種の偏見を持っていますが、当時の人々は真逆の常識を持っていました。

#### ■夏目漱石の自己本位

夏目漱石の講演が大学で何回も行われました。今日のようなテーマに関しては、漱石は晩年「自己本位」という概念を持っていました。これは自分中心とか自分勝手ということではありません。ご存知のとおり、漱石は文学論について研究していましたが、文学論について執筆しようとしても上手くいきませんでした。自分が何をしたいか分からなかったそうです。職を転々とし、最初は坊ちゃんの舞台の松山、次は熊本の高等学校へ、そこで文部省から留学を命じられてロンドンへ行きました。あまり本人は乗り気ではなく、神経衰弱と言われていたように、何を勉強しても納得できませんでした。講義を聴いても自分が考えていることとかけ離れていて腑に落ちませんでした。彼の一年間のロンドン留学の最後になってはじめて、他人の言うとおりに勉強してもダメだと悟ったと、彼は講演で述べました。もし文学論をするならば自分で進んで研究するしかない、と。

こういった経験は一般的に大人になると起こると思います。私も似たような経験がありました。助手から助教授になったときに顕著でした。当時、研究費の申請書類は膨大で、その研究の有用性など書くことが苦痛でした。社会的有用性など、解剖学と称して死体をバラバラにしても役に立つわけがないと考えました。しかし書かなければ研究ができない、といった板挟みの中で、ついに頭にきて「こんなこと書いていたら嘘をつく癖がつく！」と書くことを辞めてしまいました。すると当然お金がおりなくなりました。しかし当時は若く、他所から色々な備品などを拝借して、ベトコンと呼ばれていました。ベトコンは昔の言葉でベトナムのゲリラのことで、彼らの兵器を他人から盗んで戦っている姿に私に似ていたそうです。

そうやってしばらく凌いでいると少し偉くなり、教授の職に就きました。その頃は論文を英語で書かないと評価されない時代になっておりました。私は英語で文章を書くのに時間がかかります。なぜなら言葉にこだわりがあり、最初に日本語で文章を書いてから英訳するのではなく、適切な表現を英語で頭の中で練ってから文字に起こすからです。日本語でまず下書きする人の英語の論文はとてもわかりやすく、読みやすいです。なぜなら文章が結局日本語で構成されているからです。私はそうではなく、自分が体験した出来事や思考を端的で適切な英文で表

すことができる言葉を模索します。そもそも英語のバックグラウンドがなく、非常に時間がかかりました。そのような書き方で執筆した論文は二つ目で「この筆者はネイティブなのか」とコメントを頂けました。しかし時間と労力がかかり過ぎてしまい、次第に論文が書けなくなりました。同じ内容を日本語で書いたら三日で終わるところ、英語だと一ヶ月以上かかってしまい、仕事が全く進まなくなりました。「私は小説家ではない！」と思い、書くことを辞めました。英語で論文を書かないので、科学者として完全に干されてしまいました。

そこで日本語で書いて、研究費も要らない単行本を書こうと思い、原稿用紙で執筆し始めましたが、今度は腱鞘炎になりました。仕方がなく当時 100 万円かかるワープロを買い、女房に「いつ元が取れるのですか?!」と呆れられました。ちなみに元は取れました。しかし教授を辞めたのが 57 歳で本が売れ始めたのが 65 歳と、かなり遅咲きです。

### ■則天去私「自分で考えて行動するしかない」

漱石は 55 歳で亡くなりましたが、最後に「則天去私」と言っていました。いかにも日本人な、いわゆるインテリな大人のなり方ですね。要するに「自分で考えて行動するしかない」ということです。こうはならない人はたくさんいます。世間に言われるがまま、望まれるように振る舞えばいいので楽ですが、研究者はそうはいきません。

私は解剖学を研究していましたが、解剖はその典型です。特に臨床は難しい問題が向こうから自分を訪ねてくれます。これは自分で問題提起をする必要が無いので、非常に楽です。これに慣れてしまうと自分が怠けてしまうのではないかと危惧しました。これは個人差があって、私は自分で問題を見つけることが苦手なので楽に慣れてしまいます。未だに解剖学の意義に悩んでいます。



### ■英語表現と主体性のありか

みなさんは今、自己本位になろうとしているところでしょう。周りが認めなくとも、まず自分で考えてみましょう。少なくとも私はそこまで考え、その結果、英語での表現で悩んだのです。

みなさんは、英語のおかしさにお気づきでしょうか。昨日私は静岡へ出張し、控え室で待機していたら、英語が聞こえてきました。何度か「I am」という箇所が頭に入り、私は、この表現が気に入りません。例えば「I am a boy」という文がありますが、「Am a boy」でいいはず。なぜなら am という動詞の主語は I でしかありえないからです。極論を言えば am の前の I は全て消すべきです。パソコンの全ての I のデータを消したら記憶容量が減り、経済的です。デカルトの有名な「我思う」という原文に I はありません。

どこにも自分が無いのです。自己というものは英語の文化で強制的に入れられたのです。女房に朝出かけるときに「行ってくるよ」で済み、「私が」などと、言う必要ありません。そういう意味でアメリカ人やイギリス人は世界中に負担をかけているのだ、と言ってあげましょう。

### ■己をたてる文化

己をたてる文化は、あちらこちらに根付いています。海外のお宅にお邪魔すると、お茶にするかコーヒーにするか聞かれますが、これも気に入りません。日本なら黙っていても、飲みごろのお茶と羊羹が出てきます。そういった選択を提示されると、お茶にするか、コーヒーするのかを選択することを強制されているから気に入らないのか、と最初は思いました。しかしそれだけではなく、私が訪問するという状況において、選択する主体が存在するという暗黙のメッセージとして押し付けているのです。別に面倒なのでインスタントコーヒーを出せばいいじゃないですか。しかし私は選択する主体が存在しない文化で育ったので押し付けに感じてしまいます。日本に主体はなく、あるのは空気のみです。重要な決定事項があって後々追求すると「あの空気では、ああするしかなかった」と言います。空気というのは、その場に存在する無意識を全て平均した状況です。意識することは何かを取り上げて猛烈な勢いで増幅させることであり、脳科学的にも判明しています。相転移と物理用語で呼び、液体が気体になるような変化が脳内で起こっているそうです。



## ■主体が存在するという物語

主体が存在するという物語は、文化が強要しています。これはいつからできたかです。ラテン語には無いので、その後になります。阿部謹也さんは 11 世紀の中頃から教会が告解を広く勧めたことが発端ではないかとおっしゃっています。告解とはいわゆる懺悔で、神に罪を告白することです。キリスト教は原罪なので皆、咎人で神に許してもらう必要があります。これを月に何回か繰り返していけば、自意識というものが相当強くなり、I という概念が生まれたのでしょう。ちなみに日本人が神父さんのところへ行っても、おそらく「あの人がこういう悪いことをした」と告げ口をするでしょうね。

## ■「選択の科学」

主体が存在して、選択するという文化が生まれました。「選択の科学」という本をハーバードビジネススクールの方が書いています。その方はシーク教の女性なのですが、シーク教徒の女性は結婚相手を親に決められてしまいます。そんな文化の方がアメリカで勉強して選択について本を書いています。その本には例えばジャムを売る時、30 種類くらい棚に置くと売れません。極端に言うと、少ないほうがよく、7 種類を超えたらいけません。みなさんの脳が瞬間的に覚えられない意味のない事柄は 7 つだと言われていました。ですので、昔の東京都の電話番号も 7 桁ですし、陳列する商品は 7 つ以下がいいです。



私もデパートにたくさん並べられているネクタイを買ったことがないです。しかし空港で 2、3 本並べられていると「これいいな」と買ってしまいます。こんな話を飲み屋で話していたら「だから七不思議って言うのですね」とか、「だから八つ当たりと言うのですか」という話になりました。このような考え方で、人生を押し付けられているのかもしれない。

「選択の科学」の著者は、日本とアメリカで講義を行った際、それぞれの学生に結婚相手、職業など将来選択したい事柄について書かせました。日本の学生は 2、3 行書いて終わりましたが、アメリカの学生は A4 の用紙の裏表びっしり書いて紙が足りないと言っていたそうです。こういった文化に基づく、ある議論は楽になります。例えば戦争責任の話は、とても簡単です。ドイツのナチスは誰のせい、ヒトラーのせいだと主体性に基づいて議論がしやすいです。日本の話は困難です。文化的に主体性がないことは国際的にいけないことだ、という風潮がありますが、そうとも言えません。主体性ということもある意味、脳が作り出した幻想にすぎません。

現在、世界中でテロの脅威などが騒がれていますが、最もおかしいことは「自分が今考えていることが絶対に正しい」と思うことです。なぜそう思うかという、みなさん昨日から今日にかけて 8 時間程度意識が無かった時間帯があります。その間のご自身の意見の正当性について考えていましたか、少なくとも人生の 3 分の 1 は無意識で過ごすので、いくら正しい意見でも 3 分の 1 を割り引いて勘定しなければなりません。そういう計算をすれば、何か一つの考えに固執して過激な行動に走ろう、とはならないはず。また、人間のうち考えている部分というのはたかだか千何百グラムです。

## ■社会脳

我々の脳が、なぜこれだけ大きくなったのか、次のような理由が提唱されています。グラフを想像してください。横軸には動物の脳の大きさを全体重で割ったもの(脳が身体全体で占める割合)を取ります。縦軸にはとある指数を取ります。するとイルカ、鯨、猿など綺麗な比例関係になります。その指数とは集団のサイズです。特に霊長類は集団の社会を作りだし、他の個体との関係性について考えてきたので、脳が発達したと考えられています。そういう機能を専門家は社会脳と呼んでいます。そうでないものは、とりえず非社会脳と呼びます。なぜこのことについて言及したかという、目が覚めていて何も活動せず、ぼんやりとしている状態では社会脳が働いているということが分かっています。生物学的に脳内の特定の部位が活性化しています。非社会脳が働いているときはそれとは別の部位が活性化しています。このことを皆さんは、極めて身近な日常で経験しているはず。例えば真面目に作業しているときに突然話しかけられたら作業を同じ集中力で続けられませんか。これは非社会脳と社会脳が切り替わる瞬間です。前述のとおり人間は社会脳として発達し、進化してきました。ということは非社会脳、つまり集中して物事を考えるということはどういうことか、と言いますと、実はまだ解明されておりません。私は昔から副作用ではないかと考えています。人間の社会脳は生後 2 日目から機能しています。その時点で母親との社会を形成しています。逆に赤ん坊は難しい

ことを考え込んだりしません。我々人間のデフォルト設定は社会脳なのです。しかし現代人についてもっと詳しく調査する必要があると思います。皆さんが必死に集中して、LINE をしているときは、はたしてどちらの脳が活性化しているのでしょうか。

### ■「こうするしかない」

理工系のみなさんにお伝えしたいことは、社会に入るとこの脳のモードが問題になってきます。現在起こっている社会の問題の背景として、この現象が関わっているケースがあると考えます。例えば建材の会社が寸足らずの杭を打った問題について考えますと、職人さんは絶対に届かない杭は打ちません。日曜大工のお父さんだって打ちませんよね。絶対にやらないはずのことが起こっているの、人間がどこかに元々持っていた問題がそこに存在します。

社会人、ひいては大人になるということは漱石の言葉を使うと「自己本位」、つまり自分で考えるということです。学会がこう言っても私はこう思う、という意見を持たなければなりません。これはただの意見ではなく、感覚も含まれています。情動といいますか、「こうするしかない」と考えることです。私の場合は「日本語で書くしかない」という考えを 40 代になって持ちました。先述の通り本が売れ始めたのが 60 歳なので 20 年弱かかりました。人間が何かのプロになるためには約 1 万時間かかるそうです。何か一つのに 1 万時間従事すると自己ということが立ってきて、自己がたつと主体性などが見えてきます。



### ■仕事と道楽

同じ漱石が「仕事と道楽」という講演をしていました。これも私が生きていく上で参考になりました。彼は仕事とは世のため、人のために行うことだと言っています。この定義に従い、極端に言うと自分というものは関係ありません。就職が困難でフリーターが多かった時期に、なぜフリーターをしているのか調査したところ、7 割の方が「自分に合っている仕事を探している」と答えたそうです。私は 30 年間解剖をしていましたが、解剖に合っている人なんていないと思います。ましてや事前に分かって解剖学者になる人なんていませんよね。ただ医者という職業が世界中のほとんどの人から望まれているので仕事を請け負うだけです。江戸時代の士農工商は身分制と習いましたが、あれはただの分業ですね。権力関係も身分制度と言われますが、田沼意次など本来偉くなれないはずの人間が権力を得ていますよね。江戸時代にすでに分業が成り立っていました。私は特に若い人にこう説明します。道路に穴が空いていると転びますよね。転ぶと怪我しますよね。怪我すると嫌だから穴を埋めますよね。すると皆がお金をくれますよね。つまり仕事とは穴埋めである、と。

私は道楽として昆虫採集をしています。自分が楽しいからやっていることが道楽です。これと仕事は交わりません。仕事は他人のためだと割り切ったほうがストレスは少ないです。仕事は他人のためだから手を抜いてはいけません。道楽は誰も困らないので、存分に手を抜いてください。この話を考えると日本人は昔から変わりません。漱石も講演で、今日の私と同じように若人に説教をしていました。よく好きなことを仕事にしたい、と言う人がいますが、好きなことを仕事にしたらたまったものではありません。私も基礎医学を研究していたのでよく「好きなことをできていいね」と言われました。反論はせず、確かに好きなことではありましたが、結局できることをやっていたのです。皆様も研究成果が仕事なのか道楽なのか考えてみてください。

### ■情報とは

次は「情報とはなんぞや」という話です。私の学生の頃は、コンピュータなどありませんでした。「情報は時間とともに変化しない物」と定義します。例えば教科書などのテキストはそうです。01 のパターンで保存されたものは、そのままコピーして失われません。みなさんはコピーできないので情報ではありません。このことは自分のアルバムを見るとよくわかります。アルバムの第一ページに生後 50 日の私がありますが、この赤子と現在、高齢な私とどう関係あるのか。冷静に判断すると全く関係ありません。医学的に言うと人間は 7 年間で身体の物質が全て入れ

替わります。私は 11 回新品に入れ替わっています。客観的に物質で判断すると、私は 12 人目の私です。しかし皆さんはそうではなく、「私は私、同じ私」と考えているでしょう。

このことが日本の文化で強く意識されたのは、鎌倉時代だと私は思います。平安時代は実は情報社会です。なぜなら平安時代の和歌は詠み人知らずだからです。詠んだ人はどこか消えたけど和歌だけ残る、テキストと同じで典型的な情報です。ところが鎌倉時代は平家物語で代表されて諸行無常です。平家物語で描写される川などは同じ形で、現在もまだあり、それは人間もそうだろうと言及しています。ここで「同じ」ということが強調されます。「同じ」ということは人間固有の機能のうち、とても重要なものだと思います。動物は言葉を使えない最大の理由は「同じ」がないからです。嗅覚のような感覚ということは「違い」を捉えるものです。今までの臭いと今の臭いに違いがあるため、その臭いを捉えることができるのです。私は汲み取りの便所を使って育ってきましたが、あれは確かに臭いです。しかし、しばらく中に入っていると臭いに慣れて臭くなくなります。しばらくの時間で「違い」が無いからです。夏の暑い日にうちわを持って入って、ついうっかり顔を仰いでしまうと臭いが消えてまた「違い」を感じてしまいます。

人々は個々に違うのに「同じ」人間と呼びます。動物の例で言うと、動物は言葉がわかりません。中には「うちのワンちゃんは人間の言葉を理解できます！」と主張する人がいます。確かに「お座り」と命じると、きちんと座ります。そこでその飼い主がいなくなったときに犬に向かって「トマト」というとまたきちんと座ります。では何が分かるか、ある時に気づいたのですが、動物は全て絶対音感を持っています。小さい頃からピアノを習うと人間は絶対音感を取得できる、と言われるますが、それは過ちです。江戸時代の記録に各地域で草笛を使って鳥を呼び寄せられる人が残っています。彼らは鳥の鳴き声と同じ音階を奏でることができる絶対音感を持っています。半音ずれたピアノで同じ曲を奏でると、絶対音感を持っている人は新しい曲だと認識するそうです。皆さんも赤ん坊のときには絶対音感を持っています。動物ですから。それを失ってしまうのは言葉を持つことに有利だからです。母親に名前を呼ばれた時と父親に呼ばれた時で、声の高さが違うから自分のことではないと思ってしまうと、言葉は成り立ちません。ここで私は初めて音痴というものを科学的に定義できることに気がつきました。音痴というのは「音の高さが違っていても、同じ曲だと信じて歌うことのできる能力」です。これは人間にしかない能力です。この「同じ」ということはものすごく不思議なことですからよく考えてみてください。皆さん何でも同じにしてしまいます。どのくらい同じであるかという、ニューヨークであろうが、パリであろうが、ロンドンであろうが分からないほどです。だから、この大学もそうかもしれませんが、霞ヶ関や丸の内の会社に行くとき人工照明の明るさは一日中変わりません。極端な話ですが外へ出ると太陽は動いていますから、瞬間的に明るさは変わっています。外では風も吹きますが中では吹きません。温度は一定で床も平らです。これは何をやっているのかというと、感覚入力、つまりは違いを排除しているのです。なぜそんなことをするのでしょうか。私は教育のためにも、今後、学校は階段の高さと幅を一段毎に変えたほうがいいと思います。これをバリアオンリーと呼びます。

### ■ 「違い」が嫌なのか

どうして皆さんは違いが嫌なのでしょうか。本日私を呼んで下さった白井さん(当学教員)は森へよく行っています。森は全く違います。落ち葉が落ちていたりそうでなかったり、乾いていたり湿っていたり、木漏れ日が差したりします。森は音もします。山の流れの音だったり、反響しますから木々があるのとないのでは、全然違うのです。皆さん、そのような感覚をブロックしていませんか。それで人生は面白くないと言ったって当たり前です。チャンネルが 1 つしかないテレビを見て面白くないと言っているのと同じです。実は人間はもっとマルチタップです。色々なものが入っているのに、無意識のうちにそれを消してしまうのです。意識は脳全体が動きますから、非常に限定されたものとなってしまいます。

しかし無意識の方はそうでなく、様々な入力を、言わば平均していきます。無意識というのは、これをかなり客観的にいきます。現代社会では「同じ」にする圧力がどんどん強くなりますが、感覚を大事にしていれば、引きずられません。日本の自然は本当に美しいです。四国の山の新緑を見ていつも思います。高知県はひどいもので 8 割が人工林です。休暇中に僅かに残った山奥の自然林に行って驚きました。ものすごく綺麗な万華鏡ですよ。何十種類もの木がみんなそれぞれ違う新緑なのです。そのなかに針葉樹の黒や山桜のピンクがみごとに混ざり合



っています。この混ざり方には絶対にルールがあると思います。しかしそれは私が簡単に書けるようなルールではない。大型コンピュータを回してシミュレーションができるかどうか、というものです。しかし私たちはその美しさを非常に綺麗に理解します。理解するというより共感するというべきでしょうか。日本人はこんなに綺麗なものを見ていたのだから美しさに敏感だということも頷けます。それを 8 割切ってしまうという神経も面白いです。

### ■学生のうちに方法論を身に付けて

最後になりますが、私が大学でいつも思うことが 1 つあります。それは何を教えるのか、また何を教わるのかということです。それを考えると割合無視されているのが方法論です。これはなかなか教えようと思って教えられるものでもありません。皆さんお気づきか分かりませんが、解剖学は学ではありません。解剖とは実は方法です。カエルを解剖しようが、人間を解剖しようがそれは解剖です。永田町の解剖も、日本経済の解剖もできる。なぜなら解剖という言葉は、要するに分析に近いですが、方法論だからです。私が一番苦労して身につけたのはその方法論です。だから、極端に言えば何でもできる。日本の学問は和食学、洋食学、中華学です。和食の人間は和食に詳しく、中華の人間は中華に詳しい。しかし、私が学んだのは包丁の使い方です。包丁の使い方さえ知っていれば、和食でも洋食でも中華でも下ごしらえまではできます。方法論とはそういうことです。ですから、学生のうちにそれを身に付けることを考えて欲しい。オックスフォード出身の知り合いに、あなたはオックスフォードで何を習ったのか尋ねたことがあります。すると、大学でやったことは一週間に一度、教授にレポートを提出することだと言いました。学生のことから、さぼった週はいい加減なことを書いて出します。すると教授は一言“interesting”と言うだけで、そうだと学生はすごすごと帰るそうです。ちゃんとしたことを書いてあると「君の書いてあること的前提はこうだろう、その前提からすると、こんな可能性もある、また別の可能性もある・・・」という風に論理を詰めていきます。これは学生に対する方法論の訓練です。算数だけではない言語的な訓練の仕方、これが結構出来ていません。学生のうちに、この訓練をしっかり行って欲しいです。

私が苦労したのは意識せずして一体自分の方法とはなんだろうかと考えたことです。結局、動物の死体を見て結論を出すということをやっています。今はヨーロッパで骨を見ています。骨は文句も何も言いません。1500 体の兵隊の骨が声を揃えて平和を叫んだりもしません。黙って並んでいます。私はその前に立ちます。あるのは言葉ではありません。解剖学も典型的にそうです。目の前にあるのは死体で、それをどうするかは私したいです。私の考える自由とは、選択の自由ではなく、そのような自由です。わかっていただけでしょか。死体の前に立っても自然の前に立っても同じです。あるものは仕方ありません。私と関係なくそこにあります。それをじっと見て、何を考えるかは、全く私の自由です。では何が考えられるかというと、そこでとても苦しみます。それを昔の人は修行と言いました。今や修行はドラゴンボールにしか出てきません。時間も過ぎましたので、あとはご自身で考えてみてください。



## 第2部 懇談会

■Q 仕事とは人のためになるものだとき常々考えていると、人生から道楽がなくなっていました。研究においても良いアイデアが生まれるのは、風呂の中やランニングをしている時だという話をよく聞きますが、人生に道楽は必要なのでしょうか。

■A それはとても真剣に取り組んでいた結果ではないでしょうか。人間の脳のほとんどは、無意識下で動いていて、そういう時にアイデアが浮かんだりもします。道楽がなくて済んでいるのであれば、それは不要なのかもしれません。でも、若いですからそういう楽しみは、今後、必ず出てくると思います。

■Q 大学で方法論を身に付けることが重要だとおっしゃいましたが、人が何かのプロになるには1万時間必要であるとおっしゃいました。色々なことをやって方法論を学んでいくべきなのでしょうか、それとも今の段階である程度道を絞って極めた方がいいのでしょうか。

■A それは非常に難しいところです。それが自分で出来てくるまでが、自己本位の前提なのではないかと思えます。



■Q 専門分野はとても細分化されていますが、方法論は細分化しなくとも教育できるのではないのでしょうか。

■A 人間は2通りに分かれていて徹底的に細分すると1つにまとめようとする人がいます。発展の段階にある分野では細分化が進んでいて、ある程度成熟している分野であれば、ひとつにしてしまうのではないのでしょうか。また海のものとも山のものとも分からないような分野では細分も何もありません。ですから細分化が進んでいるところに、若い人たちが進んでいくのはお勧めしません。じきに終着点ですから。

■Q 先生にとって自由とは選択の自由ではないとお話がありましたが、自己本位に至っていない自分たちが選択の問題にぶつかったとき、どのようにして自己本位の考え方にもっていけばいいかアドバイスをいただきたいです。



■A 私は仕事の必要性で決めました。私は解剖をやっていましたが、私にとってそれは仕事です。解剖をするには死体が必要ですが、これは簡単に用意できるものではありません。最終的には検体を利用するのですが、これを色々な理由を付けて、誰も取りに行きたがりません。ここで長らく議論することになるのですが、議論している間に取りに行きに行った方が早いとわたしは気づきました。そこで私が取りに行きますと言うと、今度は先輩からお前だけいい顔する気かと怒られます。だから色々難しいのです。そういう時にどのような原則で選択をするかという、要は仕事がちゃんと回ればいいのだろうと私は考えています。

■Q もし養老先生が今の時代に大学生になれば、どんなことをしたいですか。

■A ほとんど同じことをすると思います。ですが、例えば画像処理も、ものすごく便利になりました。私たちのころは虫の写真を撮ってもどうにもならないと考えていましたが、今は全然違いますね。



実体情報学博士プログラム

<http://www.leading-sn.waseda.ac.jp/>